

## 巻頭言

### デジタルプラクティス編集委員会 委員長 平田 圭二

デジタルプラクティスの査読基準である社会的有用性について考えてみたいと思います。

コンピュータの応用範囲は今後ますます拡大していきます。本誌のこれまでの特集や一般投稿論文の内容を振り返ると、情報技術の応用分野がサービス、医療、インフラ、交通、通信、金融、商業、行政、防災・減災など多岐に広がっていることが分かり、この傾向は今後も続くと思われられます。情報系エンジニアにとって、これまで触れたことがないような応用分野の案件やプロジェクトに加わる機会が増えていきますので、どんな未知の応用分野に直面しても安定して適切に対応できる力が必要とされるでしょう。

しかし未知の分野だけに、体系的に効率良く学んだり体験できる環境は整っていないことが多く、それゆえ、情報系エンジニアの一人一人が常に積極的に学んでいくという姿勢が大切になります。もちろん学ぶだけでは不十分で、より良い情報システム作りや情報サービス提供を実現するため、学んだ技術やノウハウを現場で活かさねばなりません。大切なことは、換言すれば、これまで取り組んできたさまざまな応用分野から学び取った技術やノウハウを、今取り組んでいる未知の応用分野で活かすという姿勢あるいは能力です。この世界で長い間活躍されている方々ほど実感されておられるのではないかと思います。

デジタルプラクティスでは、情報系エンジニアの一人一人が現場で見出した技術やノウハウなどのうち、特に分野横断的に有用なものが重要だと考え、その特性を社会的有用性と名付けました。デジタルプラクティスは論文誌であり、その目的は社会的有用性のある技術やノウハウを論文という形で情報系エンジニアの間で共有し流通する場を提供することです。情報系エンジニアの方々にはぜひデジタルプラクティスをご自身のために利用していただきたいと願っています。

先日、社会的有用性の有用性を再認識する機会がありました。それは、第76回全国大会（2014年3月11日～13日、東京電機大学 東京千住キャンパス）にて「ビッグデータ時代に立ち向かうイノベティブなシステム開発～Agile, Big-data, Cloud, DevOpsのプラクティスから」というセッション[1]に参加したことです。これは本誌編集委員でもある青山幹雄先生（南山大学）と浦本直彦氏（日本IBM）が企画されたイベントで、伊藤宏幸氏（楽天）、永井修氏（日本IBM）、角田直行氏（ヤフー）によるプラクティショナならではの最先端かつ社会的有用性に富んだ招待講演がありました。講演内容は第一義的にはソフトウェア開発にかかわるものでしたが、各氏とも十分に考察してその本質を見抜いておられ、プレゼンテーションは分野外の人々にとっても分かりやすく構成されていました。そのおかげで、私自身が直面している研究開発や私がかかわっているプロジェクトの推進に役立つ多くのアイデアや示唆を受け取ることができました。社会的有用性という考え方を皆様と共有することもデジタルプラクティスの役目ではないかと感じました。

#### 参考文献

- 1) [http://www.ipsj.or.jp/event/taikai/76/event\\_1-6.html](http://www.ipsj.or.jp/event/taikai/76/event_1-6.html)